

人と地域と伝統を

「繋ぐ」

消防団

地域と共に、災害に強いまちを育む

消防団の活動は、火災や風水害の対応、地域の安全・安心のための防火パトロール、自主防災組織の訓練指導など多岐にわたります。特に、発生が危惧されている南海トラフ地震をはじめとする大規模災害や木造建築物が多く存在する地域での火災、台風などによる河川の氾濫など、被害が広範囲に及ぶケースの対応に消防団のもつ要員動員力と地域密着力が欠かせません。その地域に住み、その地域を熟知している消防団員だからこそ、避難の際に「誰が手助けを必要としているのか」を把握しているのです。

ところが、近年では過疎化の進行や地域における住民連帯意識の希薄化などによって、消防団員数は減少しており、団員の高齢化も顕著になっています。



そのため、市消防団では団員確保や若い担い手を中心とした人材育成、女性の活躍の場を増やすための対策にも積極的に取り組んでいます。

認知度向上と伝統保存の観点から、令和元年に纏を新調すると同時に、団員からなる「豊後八纏會」を結成し、市内で行われたラグビーワールドカップ2019™日本大会のイベントや大相撲巡業、トリニータホームタウンDAY、出初式で纏振りを披露。伝統の「ラッパ隊」も活躍中です。

次世代の地域防災リーダーの育成として、小・中学生を対象に防火防災の体験教育を行う「かた昼消防団かた昼は、大分弁で半日」を実施しています。市内の賀来で発祥し、昨年で20周年を迎えました。

一般団員と同じ地域の消防団に所属する女性消防団員とは別に、消防団本部付けの「女性分団」も活躍しています。消防は女性にとって体力的・時間的にも「ハードルが高い」と思われがちですが、「女性分団」では災害後方支援や市内全域への救急啓発、防災教育を主に行っています。時間の確保が難しい働く女性や子育て中の女性でも参加しやすい内容となっており、緊急時の応急手当などを知りたい」という女性にオススメです。

地域の安全を守る消防団。年々団員が減る中、大規模災害対策としても消防団の充実と強化は欠かせません。

伝統ある活動と今後のビジョン

消防団員は別に本業を持ちながら、有事の際に活動する非常勤の地方公務員。自分たちの地域を災害から守るために技術や知識を高める訓練を行い、地域住民の防災力を高め、災害被害を軽減する一助を担っています。

「頼もしい」というイメージを多くの人からもたれている消防団。そのルーツは、江戸時代の義勇消防である町火消です。当時の旗印である「纏」は現在も全国各地の消防団に受け継がれていて、上野東照宮で行われたものを起源とする「出初」も消防の仕事始め式として定着し、新年の風物詩として広く知られています。

平成25年には「消防団を中核とした地域防災力の充実強化に関する法律」が制定され、スピード感のある新たな施策展開と地域防災力の強化を目指すことが求められています。そこで、本市では消防団員が主体となつて、中長期的な活動の指針となる将来計画「大分市消防団ビジョン」を策定しました。

